

審査の結果の要旨

氏名 辻野 裕紀

本論文は、朝鮮語において〈n挿入〉と呼ばれる現象について音韻論と形態論から考察したものである。〈n挿入〉とは、現代朝鮮語で複合語形成などにおいて、前部要素の末尾が子音で終わり、後部要素が /i/ や /y/ で始まる時に、その前に /n/ が挿入される現象をさす。この現象はもともと語頭の /n/ が、/i/ や /y/ が後続する環境で脱落した通時的な変化がもとになっているが、現代語では、歴史的には /n/ を持たなかった語についても /n/ が挿入されることがあり、さらに最近では外来語にも適用されるなど、拡大して複雑な様相を見せており、通時論だけでは説明することができず、共時的な規則を見出す必要がある。また、辞書などにおける記述と実態が異なる場合も少なくないことから、母語話者がどのように発音しているかについての実態調査も必要になる。本論文はこの問題に対して、理論的な考察と実態調査に基づく分析という2つの面から接近したものである。

第1章から第3章までは問題提起と先行研究における扱いを論じ、先行研究におけるこの問題の取り扱いがいかになしであったかが示されている。第4章では、この現象がいかなる条件で起きるかについて、形態素の自立性との関わりなどの面から詳細に論じ、それに続く第5章では、通時論と共時論をともに考慮したうえで、通時的側面は発生論、共時的側面は機能論として分けて考えるべきことを示している。第6章は現代ソウル方言を対象として行った実態調査の結果を詳細に報告するとともに、この現象がどのような条件で起きているかについて分析してさまざまな要因を提示し、最後に第7章で本論文全体をしめくくっている。

本論文の意義は、この現象について、従来の研究を大きく超える大量の語例について実態調査を行っている点にある。また単に量的に多いだけでなく、語構成についても固有語、漢語、外来語、混種語から句までも考慮に入れて、潜在的にこの現象が起ころうるあらゆる環境を想定し、さらに被調査者の数も従来の研究よりかなり多く、現時点でこの現象について最も信頼すべきデータを提示している点があげられる。また、それを分析した結果、〈n挿入〉の起りやすさについて、音的環境、なじみ度、語構造等さまざまな条件が重層的に関わっていることを示している点も従来の研究を凌駕するものである。さらに、この現象についての理論的な考察においても、形態素の自立性をめぐる考察や、発生論における類推から再語彙化に至るプロセスについての考察など、随所に筆者の鋭い分析能力が発揮されている。

本論文については、社会言語学的な面が十分には考慮されていないなどいくつか改善すべき点も見られるが、何よりも大量のデータに基づいてこの現象の複雑な実態とそのメカニズムを明らかにしたことは大きな功績と考えられる。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。